＜　荒牟田1号墳出土象嵌鍔の検討　＞

福岡県立糸島高等学校歴史部

はじめに

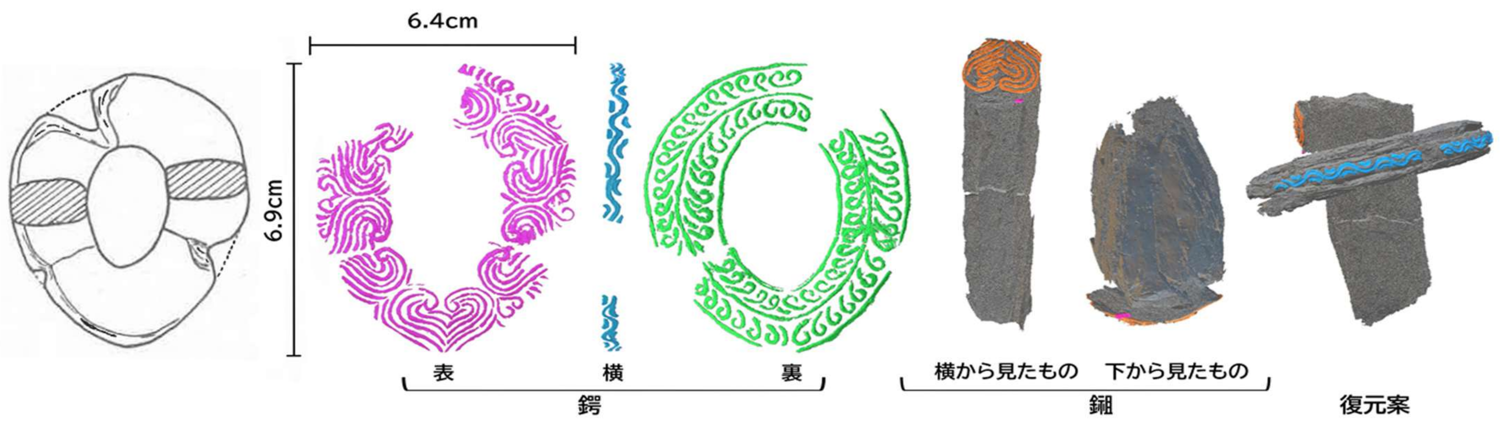
糸島高校郷土博物館に収蔵されていた荒牟田１号墳(糸島市志摩小富士、以下本品)の鍔を九州大学の協力でX線およびCT撮影を行ったところ、銀象嵌が施されていることが昨年明らかになった。

本品は鍔の表裏のテーマが異なる3つ目の事例であるとともに、表裏それぞれの文様も類例のないものであった。そこで象嵌文様から本品の編年と質的評価を行い、被葬者像に迫ることを研究の目的とする。

※「文部科学省科研費学術変革領域(A)No.21H05181流域生態系におけるヒトと自然の共生」の協力を得た。

※ 表裏が異なるものには、竹並G-121-1号横穴(福岡県行橋市)、西原18号墳(埼玉県熊谷市)の事例がある。瀧瀬芳之氏にご教示いただいた。

図1　荒牟田古墳位置



※ 鎺の曲線に沿わない象嵌線は鍔から遊離したものであり、該当箇所が欠損している心葉文側が表とわかる

図2　象嵌鍔・鎺・復元案

1. 心葉文象嵌鍔の分類・型式変化

器物には製作-使用-不使用の三段階があり(田中2018)、古墳の年代は器物の製造年代ではない。そのため、象嵌鍔の研究も型式学的な研究が主流になっている(瀧瀬・野中1996、大谷2018、藤井2022)。よって、分類を行い型式変化を明らかにすることで、他の鍔との前後関係を確認する。

(1) 主題の分類・型式変化

心葉文の枚数の違いは構図の違いであると同時に、心葉文の大きさや縦横比などの規格およびその内部の文様を規定しうるものである。そのため、ここでは心葉文の枚数を6枚、6枚超過、6枚未満にわけ、大分類とする。中分類としては、大谷氏の論考(大谷2018)を参考に、「縦線系統」と「多重系統」を設定する。主題の小分類は図3の通りである。

※ 斜線・扁平斜線型については、多重型と斜線型の双方がみられる個体の存在から、曲線部分を彫刻する「技術的課題(鈴木2005)」を忌避した結果出現したと考え、多重系統とする点が大谷氏の見解と異なる。

※ 縦横比が0.6を下回るものについて扁平とした。

図3-1　縦線系統の小分類

主　題

図3-2　多重系統の小分類

	通番	遺跡名	鳥文	開き	曲線	直線
普通	33	芝塚古墳S6	10			
	28	鋤崎古墳群A群９号墳		3		
	35	伝群馬		3		
	16	稲荷塚１号墳		1	2	
	14	高倉古墳群			13	
	1	大年寺山第１号横穴			1	2
	26	古天神古墳			12	2
	42	日向・洗水遺跡			10	1
	36	桑山南１号墳			3	2
	2	蝦夷穴13号横穴墓			1	3
	18	井田松江18号墳				6
	11	広木大町９号墳				8
	12	**広木大町20号墳**				1
扁平	31	中尾６号地下式横穴墓			3	3
	6	飯塚２号墳				5

6枚　6枚超過　6枚未満

図4-1　縦線系統の型式変化

	通番	遺跡名	多重 への字 くちばし	多重 への字	多重 標準	多重 内包斜線	斜線	一線
普通	40	荒牟田１号墳	3	2				
	3	八幡横穴群２号横穴		18				
	12	**広木大町20号墳**		2	11			
	13	瓢塚40号墳			20			
	29	竹並G-121-1号横穴			5			
	34	芝塚古墳S8			13			
	15	桜土手25号墳			2		5	
	19	井田松江4					12	
	20	井田松江18号墳					7	
	41	道田池３号墳					4	
	25	浜坂14号横穴墓						2
扁平	24	三津５号墳				3		
	22	駿馬炭焼古墳				2	6	
	30	上ノ原59号横穴				1	7	
	38	黒袴台遺跡SZ-6						4
	39	弘法寺						4
	17	本郷大塚古墳						8

図4-2　多重系統の型式変化

① 縦線系統の型式変化　先行研究通りに鳥文を最古とし、扁平のものを新しいと考える。さらに一つの鍔の中で複数の分類にまたがる状況を踏まえて作成したのが図4-1である。

② 多重系統の型式変化　縦線系統と同様に、扁平を新しいとした基準で作成したのが図4-2である。本品は最古段階に位置づけられる可能性があることが分かる。

(2)副題の分類・型式変化

心葉文の隙間に施される象嵌文様を副題と呼称する。大分類として、樹枝状文系統と同心円文系統がある。副題の小分類は図5の通りである。なお樹枝状文系統の分類は藤井氏(藤井2022)を参考にした。

※ 芝塚古墳S6において樹枝状文様に先行する形として、鳳凰文(図6参照)を設定した点が藤井氏の分類と大きく異なる。

図5-1　樹枝状文系統の小分類

図5-2　同心円文系統の小分類

※ 芝塚古墳S6の副題の鳳凰文(写実)においても、主題同様亀甲繋鳳凰文の文様の変化から、鳥文であると考えられる。

図6　芝塚S9柄頭

① ルジメント　輪郭線(図7桃色線)を比較すると、芝塚古墳S6のものは痕跡化している。よって、本品は芝塚S6に先行すると考えられる。芝塚が主題・副題ともに鳳凰文であるならば、先行する本品も鳳凰文であると考えられる。改めて本品の主題中央(図7青色線)と副題(図7橙線)をみると抽象化された鳳凰の頭部表現と認識できた。一般に文様は簡略化されるため、芝塚が写実的で、先行する本品が抽象的では、時系列的に不自然である。上段の青色線の左右の長さが異なる点、下段の線が均等割り付けでない点を勘案すると、本品のものは単鳳環頭大刀をモチーフにした可能性が高い。よって心葉文には、亀甲繋鳳凰文から変化し写実的な鳳凰文を施す芝塚古墳S6を祖とする一群(縦線系統)と単鳳環頭大刀から変化し抽象的な鳳凰文を施す本品を祖とする一群(多重系統)の2系統があると考えたい。

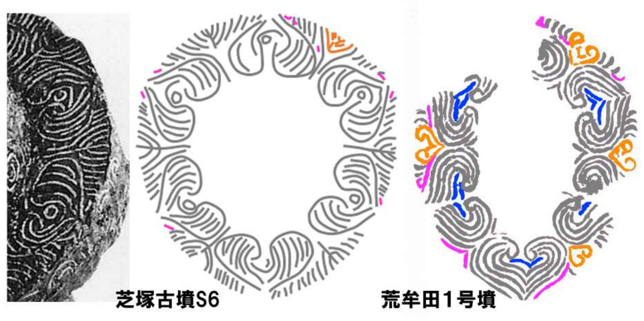


図7　ルジメントとしての輪郭線

② 樹枝状文系統の型式変化　図8-1を見ると接合・剥離・平行の割合が心葉文の枚数ごとに異なることが分かる。このことから6枚がそれ以外に先行することが明らかである。

③ 同心円文系統の型式変化　樹枝状文の影響のない単独の同心円を最古とし、樹枝状文の文様を共有している合作、両者が混ざりあった融合へと変化する。

	遺跡名	通番	鳳凰文 ねじ込み 抽象	鳳凰文 ねじ込み 写実	樹枝状文 ねじ込み 脇線	樹枝状文 ねじ込み 中心線	樹枝状文 ねじ込まない 中心線	合作 ねじ込まない 内包
接合	荒牟田１号墳	40	5					
	芝塚古墳S6	33		1	4	6		
	大年寺山第1号横穴	1			1	3		
	中尾6号墳	31			1	1		
	蝦夷穴13号横穴墓	2				2		
	道田池３号墳	41				3		
	日向・洗水遺跡	42				3		
剥離	中尾6号墳	31			1	1		
	稲荷塚１号墳	16				1		
	井田松江18号墳	20				2		

	遺跡名	通番	鳳凰文 ねじ込み 抽象	鳳凰文 ねじ込み 写実	樹枝状文 ねじ込み 脇線	樹枝状文 ねじ込み 中心線	樹枝状文 ねじ込まない 中心線	合作 ねじ込まない 内包
接合	高倉古墳群	14				2	8	
剥離	高倉古墳群	14				2	8	
	本郷大塚古墳	17					7	
	井田松江18号墳	18					4	
	広木大町 9号墳	11						4
平行	芝塚古墳S8	34				8	4	
	桑山南１号墳	36					5	

	遺跡名	通番	鳳凰文 ねじ込み 抽象	鳳凰文 ねじ込み 写実	樹枝状文 ねじ込み 脇線	樹枝状文 ねじ込み 中心線	樹枝状文 ねじ込まない 中心線	合作 ねじ込まない 内包
接合	上ノ原59号横穴	30			1	2	2	
	飯塚２号墳	6				3	1	
	黒袴台遺跡SZ- 6	38					1	
剥離	上ノ原59号横穴	30			1	3	2	
	駿馬炭焼古墳	22				7	1	
平行	三津5号墳	24					1	
	弘法寺	39					4	

図8-1　樹枝状文系統の型式変化

遺跡名	通番	単独 同心円	合作 ねじ込まない 同心円	合作 ねじ込まない その他	融合 内包	融合 追いねじ込み 上部装飾
稲荷塚１号墳	16		2			

遺跡名	通番	単独 同心円	合作 ねじ込まない 同心円	合作 ねじ込まない その他	融合 内包	融合 追いねじ込み 上部装飾
八幡横穴群２号横穴	3	18				
稲荷塚1号墳	16		2			
桜土手25号墳	15		3		1	
広木大町 20 号墳	12			5？		6
古天神古墳	26				1	12
広木大町 9号墳	11				1	
瓢塚40号墳	13					1

図8-2　同心円文系統の型式変化

(3) 型式変化

主題と副題の組み合わせを示した物が図9である。最も新しい分類の組み合わせとなるものを黒字とした。

広木大町9号墳が多重と縦線の両方を持つことから段階4と段階IIが同時期であることが分かる。

図9-1　心葉文の変化(縦線×樹枝状文)

図9-2　心葉文の変化(縦線×同心円)

図9-3　心葉文の変化(多重×樹枝状文)

図9-4　心葉文の変化(多重×同心円)

2. 象嵌文様の品質

(1)レイアウト

人が美しいと感じる対称性(川端2011)を意識し象嵌が配置されていることから、主題の割付精度の評価基準を作成した(図10)。

この分類を元にレイアウトの評価を行った結果、本品が優れた設計思想に基づいて作成されたものであったことが分かった(図11)。

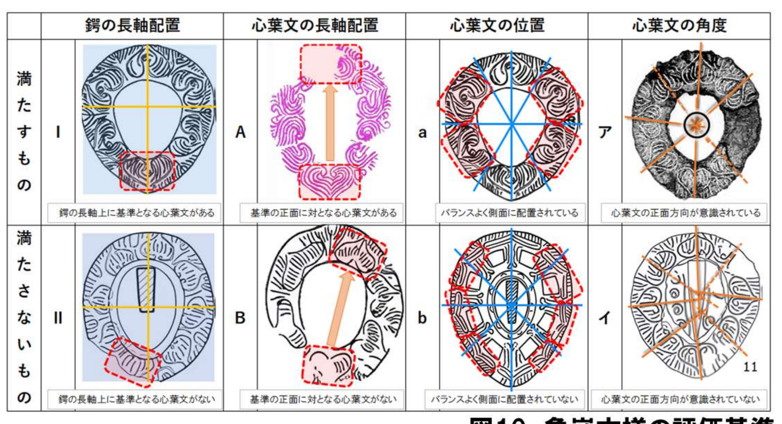


図10　象嵌文様の評価基準

※ IIやBは、鍔の長軸に基準となる心葉文を配置しておらず、対称に作ろうという意図を持っているとは考えづらい。これらは、師弟関係での技術的な伝承がないだけでなく、設計を行う上での「形状模倣(勝部・鈴木1998)」も行えていない。aは左右の心葉文が正位置〔6枚では鍔の1/4(90/360°)に対して、1:2(30°:60°)の位置〕にあるのかを検討したものである。これは留意して作業をすることで「形状模倣」が可能なものである。それに対して、ア〔心葉文の凸部と凹部を結んだ直線を延長したものが、整然と交差する(6枚では2箇所)〕は、容易に気付くことのできない観点であり、師弟関係で正しく技術伝承が行われた証左であると考える。

～6枚	aア	aイ	bア	bイ
ⅠA	30,39			38
ⅠB				22
ⅡA				
ⅡB				6

6枚	aア	aイ	bア	bイ
ⅠA	1,33,40,42			
ⅠB				20,31
ⅡA				
ⅡB				29

6枚～	aア	aイ	bア	bイ
ⅠA	12,14,36	18	17	11
ⅠB		34		13
ⅡA		26		
ⅡB				19

	aア	aイ	bア	bイ
ⅠA	S	A1	A1	A2
ⅠB		B1		B2
ⅡA		C		
ⅡB				D

図11　象嵌鍔の品質評価

この品質評価を時代順に並べなおしたものが図12である。「歴史的水準(勝部・鈴木1998)」が低下していく中で、赤色枠の事例は「属人的水準(勝部・鈴木1998)」が高度であったものであると考えられる。また桃色枠の事例も樹枝状文が剥離しており、実際はもっと新しい時期のものである可能性が高い。このような事例は「復古再生(岩本ほか2023)」の事例として理解できる。

※ 中心線×ねじ込みを「中心線1」、中心線×ねじ込まないを「中心線2」、同心円×単独を「同心円1」、同心円×混合を「同心円2」と表記した。

図12　象嵌鍔の品質推移

(2)象嵌密度

心葉文内部に施された象嵌線の密度について偏差値で示したのが図13である。縦線系統・多重系統ともに高密度・中密度・低密度の3つの段階に分けることができる。すでに6枚が他より古いことが分かっているので、時期的な密度の差は工人の「歴史的水準」の低下を意味するものと考えられる。

※ 密度　：心葉文内における象嵌線の面積(輪郭線をのぞく、太さは0.7mmで計算)／心葉文の面積
偏差値：縦線・多重合わせた密度の平均値をもとに偏差値を計算した。

縦線系統が低密度のものが少ないのに対し、多重系統においては、低密度のものが多く、単純に比較はできないものの、本品の密度が少なくとも多重系統においては圧倒的に高位であることがわかる。

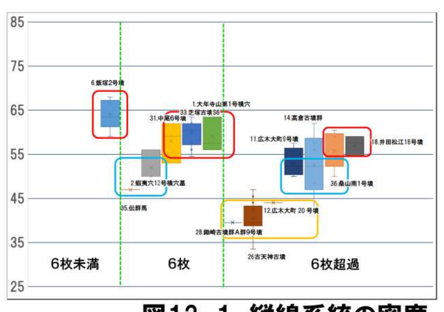


図13-1　縦線系統の密度

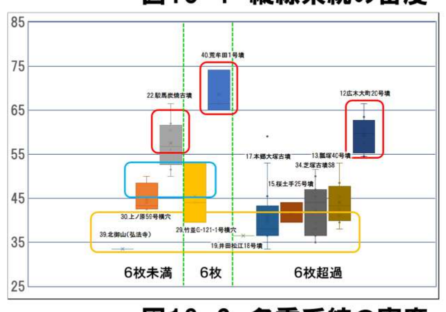


図13-2　多重系統の密度

3. 分布の傾向

図14から北関東と北部九州への分布の集中と、地域によっては明確な空白地域があることがわかる。象嵌鍔の地方生産の可能性(鈴木2017)も想定される。また近畿での出土数が少ない状況から、特に東西の「前線」に位置する人々が保有していたという印象を受ける。

心葉文の枚数が、時間軸を反映するものであるので、北関東・東北南部ではヤマト政権の勢力圏の北上が見て取れる。

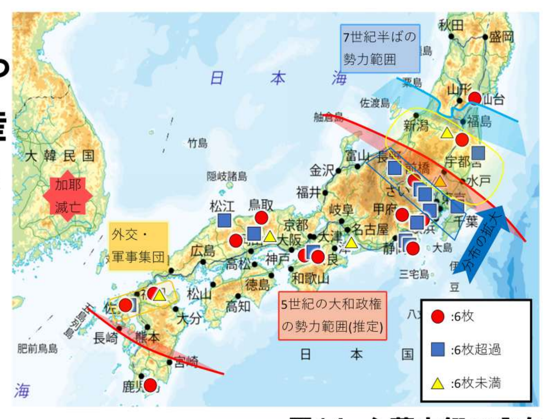


図14　心葉文鍔の分布

まとめ

(1)象嵌鍔の位置づけ

① 編年　心葉文について主題と副題を組み合わせた型式学的変化、レイアウト、品質の3つの観点から、編年(図15)を行った。その結果、本品がすべての要素で古い特徴をもつことが分かった。輪郭線からも芝塚古墳S6より古くなるので、最古の心葉文象嵌鍔となる。

※ 石室や須恵器から荒牟田１号墳はTK43であり、本品の年代はそれと同じかさかのぼることになる。

ここで用いた心葉文の枚数による大分類の設置や、主題と副題の組み合わせを用いた型式変化、それらを品質など他の観点から整理した点などが本研究の成果であり、縦線系統と多重系統の平行関係について整理することができた(図16)。それらをまとめたものが図17である。縦線系統と多重系統は端部丸やお互いの副題を採用するなどの交流を行っていたが、最終段階ではお互いの副題の融合などより一体化が進んでいったと考えられる。

縦線系列	多重系統
	Ⅰ
1	Ⅰ
2	
3	
4	Ⅱ
4	Ⅲ
4	Ⅳ
4	Ⅴ

図16　心葉文の平行関係

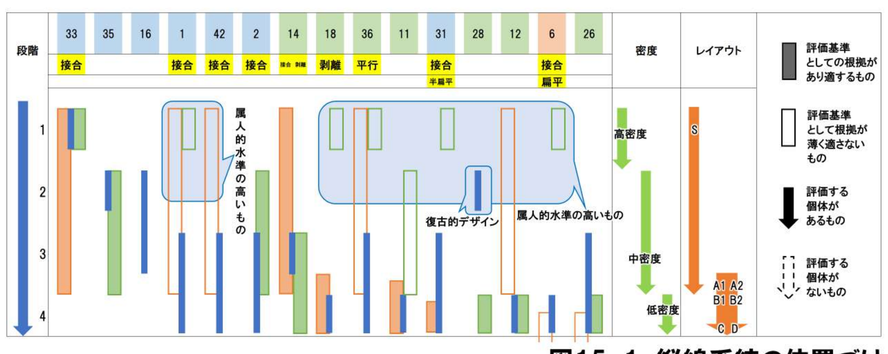


図15-1　縦線系統の位置づけ

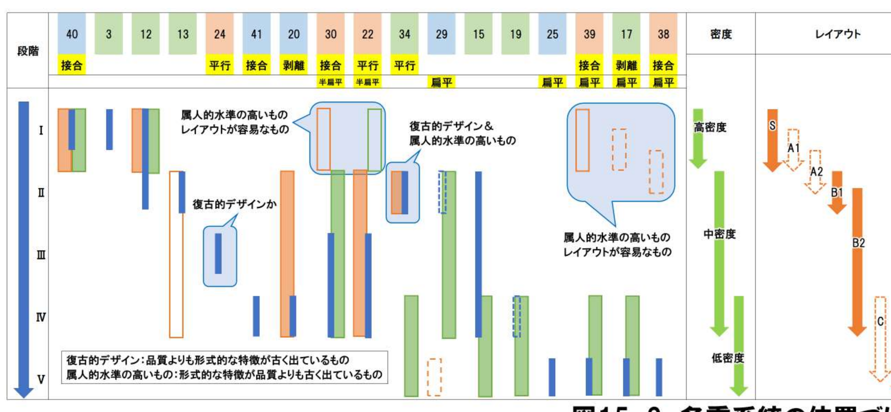


図15-2　多重系統の位置づけ

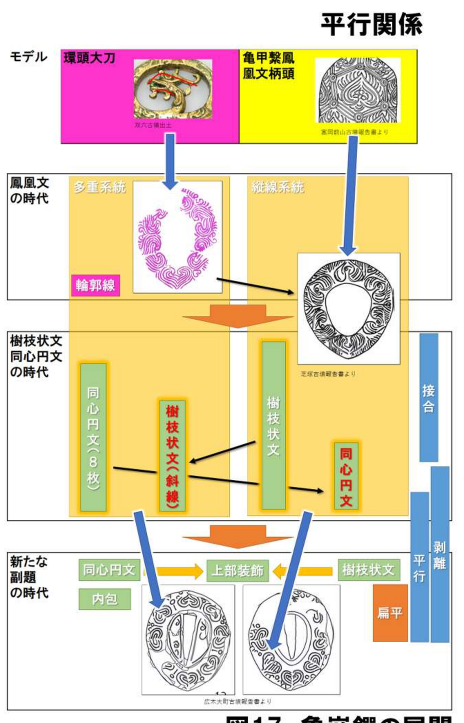


図17　象嵌鍔の展開

(2)荒牟田古墳の被葬者像

① 本墳の概要　20mの円墳で、両袖の横穴式石室を主体部にもつ(奥行4m、幅2.5m、羨道5m)。小札・頸鎧、金銅装馬具、鉄鉾等が出土している。心葉文象嵌鍔出土古墳で甲冑と金銅装馬具を持つものは他になく、同種の古墳の中でも高位に位置する。

甲冑	5
装飾付大刀	17
金銅装馬具	22
鉾(石突)	7+3

(n=596)

図18　荒牟田１号墳と同じ副葬品を持つ古墳

② 本墳の被葬者　糸島・福岡市の後期古墳(596基)との比較からは副葬品・石室ともに最上位層であることが分かる(図18・19)。福岡地域における最有力集団とされる元岡・桑原古墳群の同時期の桑原石ヶ元6号墳と比べても同等である。むしろ鋤崎A-9号墳から鳥文の特色を残す鍔と金銅装頭椎大刀(齊藤2020)が出土していることを根拠に、鳥文が特別視されていたと考えるのならば、荒牟田１号墳の被葬者も、糸島半島でも屈指の有力者であった可能性が高い。

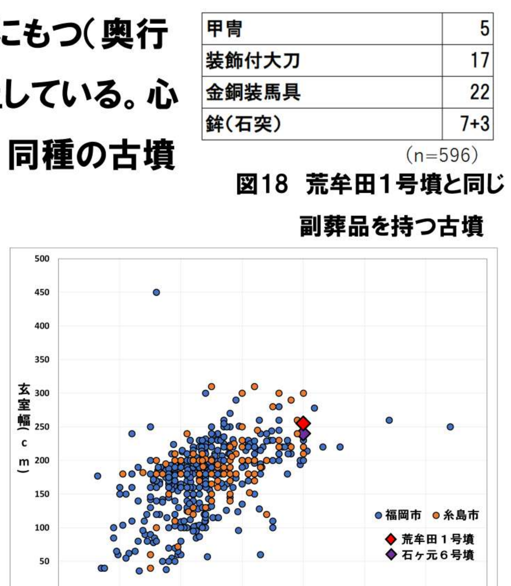


図19　糸島・福岡市の横穴式石室規模

本品は、最初期の心葉文象嵌鍔であり、その品質も非常に高いものである。このような物が出土する背景は、ヤマト政権の非常に強い関心がこの地に注がれていたからだと考えられる。それは被葬者が生きた6世紀半ばという時代に、伽耶の滅亡などの軍事的緊張の高まりの中で、磐井の乱後に解体されていたであろう在地軍事集団の再「組織化(町田1976)」に階級を示す器物として頭椎大刀や象嵌鍔が用いられ、その前線指揮官に荒牟田１号墳の被葬者が任命されたからに他ならない(図20)。

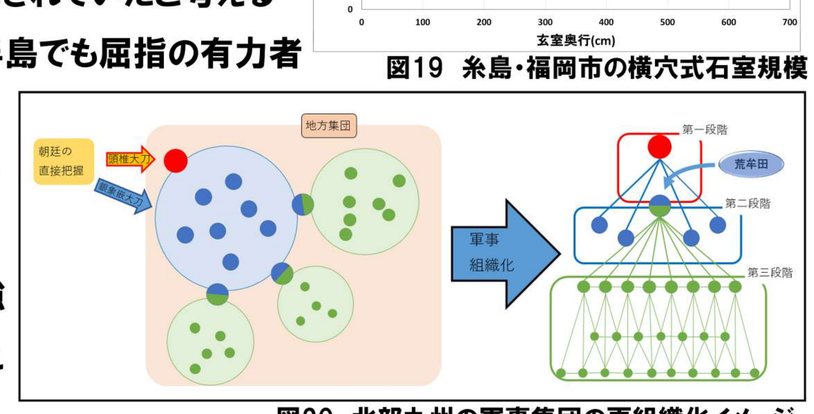


図20　北部九州の軍事集団の再組織化イメージ

※ GHQ統治下における大日本帝国陸・海軍の解体と、朝鮮戦争開始を受けての警察予備隊の設立などの再軍備化をイメージした。

参考文献
岩本崇ほか　2023『器物の「伝世・長期保有」「復古再生」の実証的研究と倭における王権の形成・維持』島根大学法文学部
大谷晃二　2018「古天神古墳出土大刀の時期と系譜」『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会
勝部明生・鈴木勉　1998『古代の技-藤ノ木古墳の馬具は語る-』吉川弘文館
川端秀明　2011「美の認知」シンポジウム『視覚認知とその障害』
京都国立博物館HP　1994「型式変化とルジメント」
齊藤大輔　2020『古墳時代の武装と境界領域』
鈴木勉　2005「古墳時代の鉄事情からみた象嵌技術」『文化財と技術』4　工芸文化研究所
鈴木勉　2017「日本古代象嵌技術の起源と展開」『文化財と技術』8　工芸文化研究所
瀧瀬芳之・野中仁　1996「埼玉県内出土象嵌遺物の研究」『研究紀要』第12号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中祐樹　2018「実用性に着目した古墳時代馬具分析からみえたこと、みえてくること」『古代武器研究』14　古代武器研究会
橋本英将　2014「金銅装頭椎大刀の佩用者と被葬者象」『文堂古墳』大手前大学史学研究所
藤井雅大　2022「第4説　特徴的な副葬品　1　象嵌装大刀」
『桑山南古墳群　細畝古墳群　一般国道53号(津山南道路)改築工事に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財調査報告書255
町田章　1976「環頭の系譜」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所